



## 本当の人生

言友会 中高校生の吃音の集い せんざき 先崎 翔吾

「えっと・・・立教大学の・・・あの一、あの一、先崎・・・えっと・・・翔吾です」

これが去年までの僕です。私の自己 PR をさせていただきますと、明るくて人が大好きで、とってもおしゃべりです。しかし、静かな空間や、大事な面接、プレゼンテーションではどもりそうになってしまいます。それでも、私は決してどもりません。なんとしてでも隠し通します。私は普通の人間なのだと自分に言い聞かすのです。話せる日はとことん話し、今日は無理だと判断したら極力話さないようにする。こんな生活を私は 22 年間もしてきました。しかし、その中で様々なものを得て(皮肉になってしまいますが・・・)、今では自分と向き合い、人生を前向きに捉えられるようになりました。本日は、これまでに私が経験した内容について述べさせていただきますと思います。

私がどもり始めたのは幼稚園生の頃でした。どもろうが、話せようが、とにかく喋る幼稚園児だったことを私は覚えています。幼稚園での出来事は全て母親に話していました。「きよきよきよ今日ね！○○君と、すっす砂場に、ててててて天下一舞踏会(ドラゴンボールの)作ったよ」そんな話に母はにこにこしながら「そーなんだー」って聞いてくれました。私は、吃音について全く認識がありませんでした。吃音を恥じることなく、ありのままに生きていたような気がします。

小学 1 年生になっても私の性格は変わらず、おしゃべりな吃音持ちの男の子でした。しかし、ある日を境に私が私でなくなるのです。いつも通り母親に、「きよきよきよきよ今日さー」と話しますと、母に口を出されました。「翔吾、ゆっくり話してごらん。ゆっくり話したら、きっと皆みたいに話せるから。大丈夫だよ」私は、何が「大丈夫」なのかわかりませんでした。「皆みたい」も理解できませんでした。母が私のどもりを良く思っていないことだけはわかりました。もちろん、それが母の愛であること

も、母が私の将来を心配してくれていることも、今なら十分わかります。しかし、この事から、私は母に話をするのが恐くなってしまいました。どもることによって母の悲しそうな顔を見たり、怒られるのが嫌だったからです。この日から話せる時に、話せる単語だけを使う、私の仮面を被った生活がスタートしました。

小中高と大きくなるにつれて、良くも悪くも私は、吃音を隠すテクニックを覚えました。どもりそうな時「えっと」や「あの一」を挿んだり、手を叩いてリズムを取ったり、違う言い回しを使ったりなどです。家族との話も、どもらず話せる内容だけで話し、それ以外は諦めました。話しててどもりそうになった時は言うことを忘れたフリもしました。どもりを隠してる私に対して、母は「最近どもらなくなったね」と褒めるようになりました。おかげで、母が私を心配する悲しそうな顔は見ないで済むようになったのですが、その一方で、「どもりはいけないもの・どもると大切な人に嫌われる」という認識は益々強まっていきました。

大学生になると、私の仮面は日常生活では簡単に壊れないだけの分厚く、硬い仮面へと成長しました。仮面の中の私を知る者は1人もいませんでした。仮面を被った私は、とにかく喋る、明るい学生でした。テクニックを利用し、言える言葉だけをチョイスすれば、スラスラ話せるのです。しかし、人前でスラスラ話せる自分を好きになり、理想化してしまったため、何としてでも吃音を隠そうという気持ちが増々強くなったと思います。この隠す行為により、自分でたくさんの制限を生み出していました。友達と飲食店に行っても、特に食べたくもない、言い易いメニューを注文し、講義での質疑応答も決して手を挙げませんでした。特に辛かったのは、人にお礼を言いたい時に、「ありがとう」ではなく「すいません」になってしまったことです。感謝の気持ちをちゃんと伝えられないのは、ものすごく辛いことでした。上手く喋れる日は楽しく、ども

りそうな日は憂鬱でした。もっと言ってしまえば、どもりの日は嘘の自分であり、ハキハキ喋れる日こそ、本物の自分なのだと感じていました。いつか、テクニックを完璧にマスターし、吃音が治った時から私の本当の人生が始まるのだと感じていました。

しかし、大学 3 年になると、ついに分厚くて硬い仮面にヒビが入り始めました。就職活動や、ゼミの発表の度に皆の前で話す機会が増え、喋るのが大好きなはずなのに、発表の時は下を向いて、「えっと」ばかり言っておどおどしていました。先生や友達には「緊張しすぎだよ」とか「ちゃんと練習しておけばよかったのに」など言われましたが、家では何度も何度も練習しましたし、緊張なわけでもありません。とにかく悔しくて、「吃音」という私の苦しみを理解して欲しいという感情が芽生えました。この頃からやっとなりの人に吃音のことを話せるようになりました。友達は優しく「そうなんだ。だけど、翔吾は普通だし、気にならないよ。考えすぎだよ」と励ましてくれました。しかし、私が求めるものは、「気にならない」という言葉ではありませんでした。勇気を出して両親にも話しましたが、「お前のどもりはもう小学校で治ってるんだから大丈夫。ただ緊張しやすいだけだよ」と言われてしまいました。今思えば、仮面を被った状態で弱音を吐いても理解してもらえないのは当然なのに、私には理解者がいないんだ・・・と悲しくなりました。

しかし、1 人だけ両親とも皆とも全く違う反応を示す友達がいました。吃音症のことを話しても、「何それ？よくわかんないけど、あんま興味ないわ」と、私の話を打ち切るのです。別の日に、吃音のせいで、バイトが辛いこと、授業で発表できないこと、就職活動の面接が不安なことを打ち明けると、「うじうじうるさいな。自分の個性を隠してる奴が就職できるわけないじゃん！！どもってもいいから、何でも挑戦してみりゃいいじゃん！言うておくけど、どもることより、そうやって言いわけしてる方が何十倍もかっこ悪いかんね！」とハッキリと言ってくれました。私が求めていたのは、逃げる自分を叱ってくれる存在だったのです。私はずっと「どもってはいけない」と感じていたので、友達や親の前でも、仮面を外して休むことができないでいました。常に役

者でいたのです。しかし、やっとなりを外してありのままを見せられる存在に出会えたと思いました。その日、私は久しぶりに人前でどもりました。「えっと」や言い回しなどの装備品を全て取り外して、裸の自分で話しこんだのです。小学生ぶりでした。どもりまくりでしたが、その友達に対して言いたいことは全て伝えられました。友達も「いつもの回りくどい話し方よりも、よっぽどいいじゃん」と言ってくれました。喋るって、こんなに簡単でこんなに楽しいものなのかと実感した瞬間でした。

それから私は変わりました。千葉言友会に参加し、この中高生の集いのミーティングに参加し、吃音を隠していた頃の自分が間違っていたのだと理解することができました。どもりを隠すことが「普通に生きる」ということだと思っていた私ですが、それは大きな間違いであり、どもろうが話せようが自由に話をし、挑戦する今こそ「普通に」生きているのだと思います。だから、今では、どもりながらも飲食店で食べたいものを注文し、講義でも発表もできます。笑顔で元気よくどもっています。それでも、友達や先生も前よりも良くなったと褒めてくれます。それに、受け入れてからの方がどもらなくなった気もします。そして、ようやく両親にも「どもる自分」を見せることができました。初めは驚いたようでしたが、今の自分の気持ちを全て話すことによって、理解してもらえました。遠回りはしたものの、やっとなりのままの自分を自他共に認めることができたのです。もし、小学生の時に、どもる自分を両親が理解してくれていたなら・・・とってしまうこともありますが、もう過ぎたことです。この体験談では、両親について少し悪く書いてしまいましたが、私は決して両親を恨んでいません。むしろ、育ててくれたこと、私の吃音を真剣に心配してくれたことは感謝しています。ただ、欲を言えば、私は両親の前ではありのままでしたかった。ありのままの私を認めて欲しかった。学校で辛い思いをしている分、家では自由に話したかった。これが本音です。しかし、私は変わりました。就職活動をする前にありのままの自分を受け入れられることができ良かったです。私の人生は捨てたもんじゃありません。ありのまま生きている今こそが、私の本当の人生なのです。